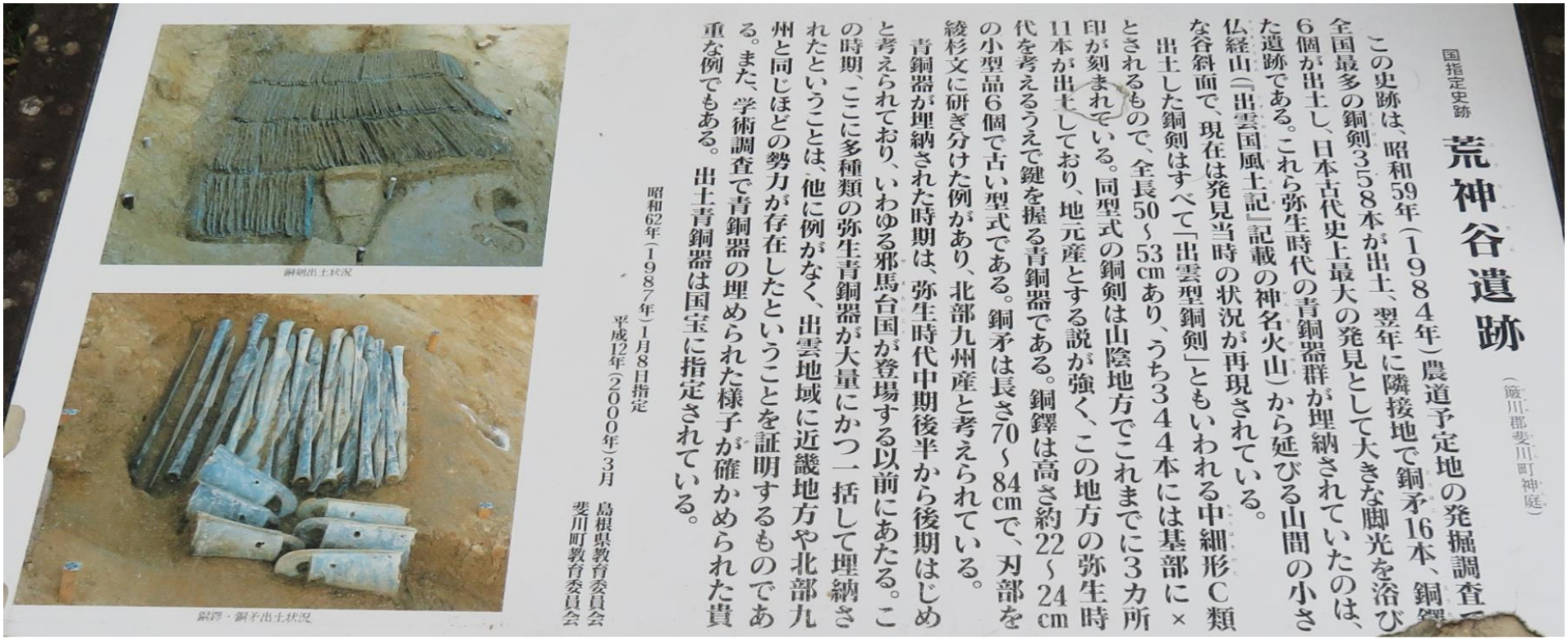
荒神谷遺跡（雲南市斐川市）

荒神谷遺跡は昭和58年(1983年)広域農道建設に伴う遺跡分布調査で、調査員が田圃の畦道で一片の土器(古墳時代の須恵器)を拾った事がきっかけとなり発見されたと云う

荒神谷で発見されるまでは、全国の銅剣出土総数は300本余りだったが、昭和59年(1984年)に荒神谷では4列に並んだ同じ形の銅剣358本が一度に出土した/銅剣が埋納されていたのは、小さな谷間の標高22mの南向きの急斜面で、昭和60年には、その時点からわずか7m離れて銅鐸と銅矛が出土した/文化圏の異なる銅鐸と銅矛が併存する事は有り得ないとされてきたが、それが同時に埋められていた、つまり文化圏の異なる二つの金属器が同時に出現したということらしい



国指定史跡

荒神谷遺跡

（簸川郡斐川町神庭）

この史跡は、昭和59年（1984年）農道予定地の発掘調査で全国最多の銅剣358本が出土、翌年に隣接地で銅矛16本、銅鐸6個が出土し、日本古代史上最大の発見として大きな脚光を浴びた遺跡である。これら弥生時代の青銅器群が埋納されていたのは、仏経山（『出雲国風土記』記載の神名火山）から延びる山間の小さな谷斜面で、現在は発見当時の状況が再現されている。

出土した銅剣はすべて「出雲型銅剣」ともいわれる中細形C類とされるもので、全長50～53cmあり、うち344本には基部に×印が刻まれている。同型式の銅剣は山陰地方でこれまでに3カ所11本が出土しており、地元産とする説が強く、この地方の弥生時代を考えるうえで鍵を握る青銅器である。銅鐸は高さ約22～24cmの小型品6個で古い型式である。銅矛は長さ70～84cmで、刃部を綾杉文に研ぎ分けた例があり、北部九州産と考えられている。

青銅器が埋納された時期は、弥生時代中期後半から後期はじめと考えられており、いわゆる邪馬台国が登場する以前にあたる。この時期、ここに多種類の弥生青銅器が大量にかつ一括して埋納されたということは、他に例がなく、出雲地域に近畿地方や北部九州と同じほどの勢力が存在したということを証明するものである。また、学術調査で青銅器の埋められた様子が確かめられた貴重な例でもある。出土青銅器は国宝に指定されている。

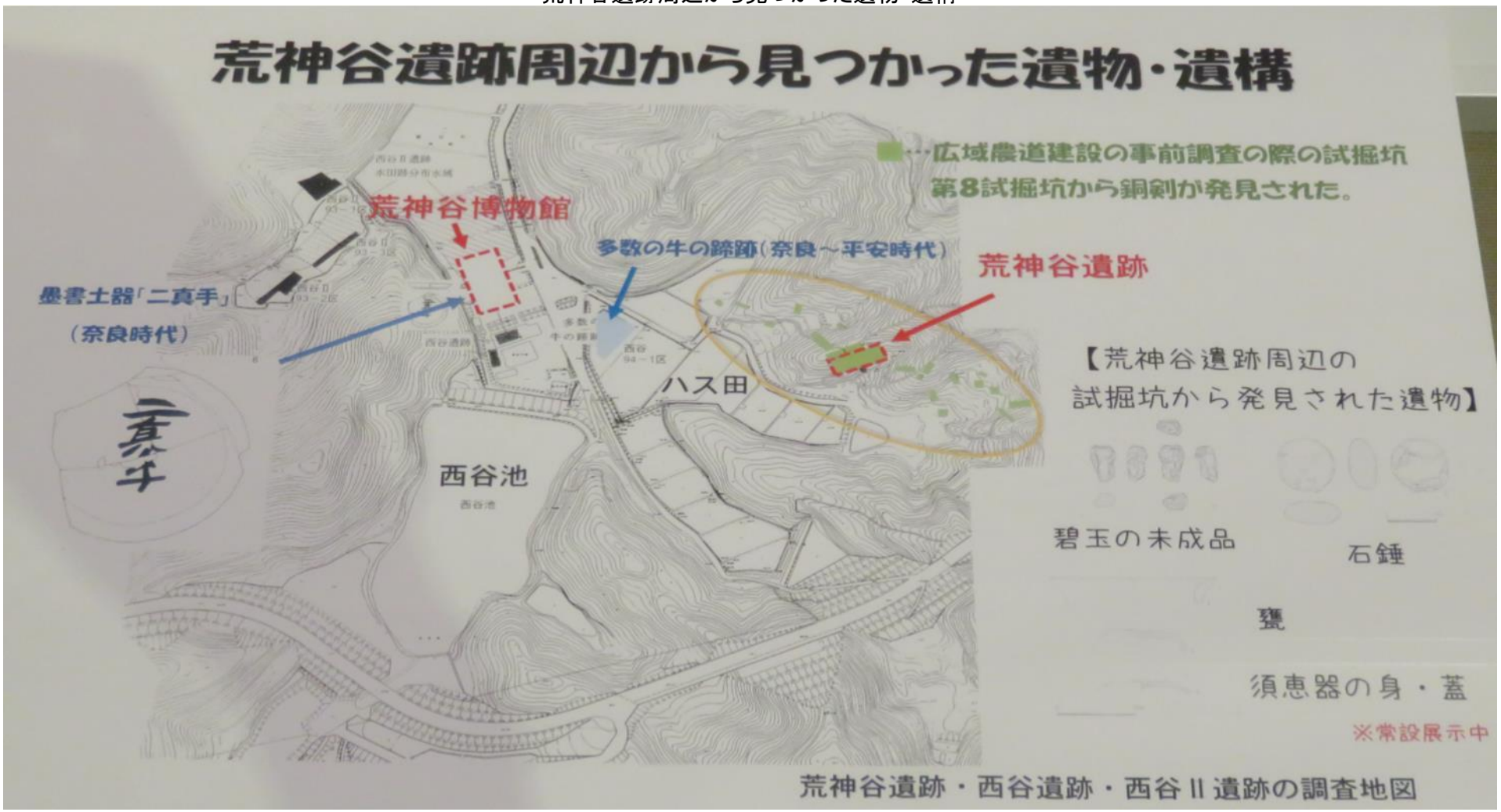
昭和62年（1987年）1月8日指定
平成12年（2000年）3月

島根県教育委員会
斐川町教育委員会

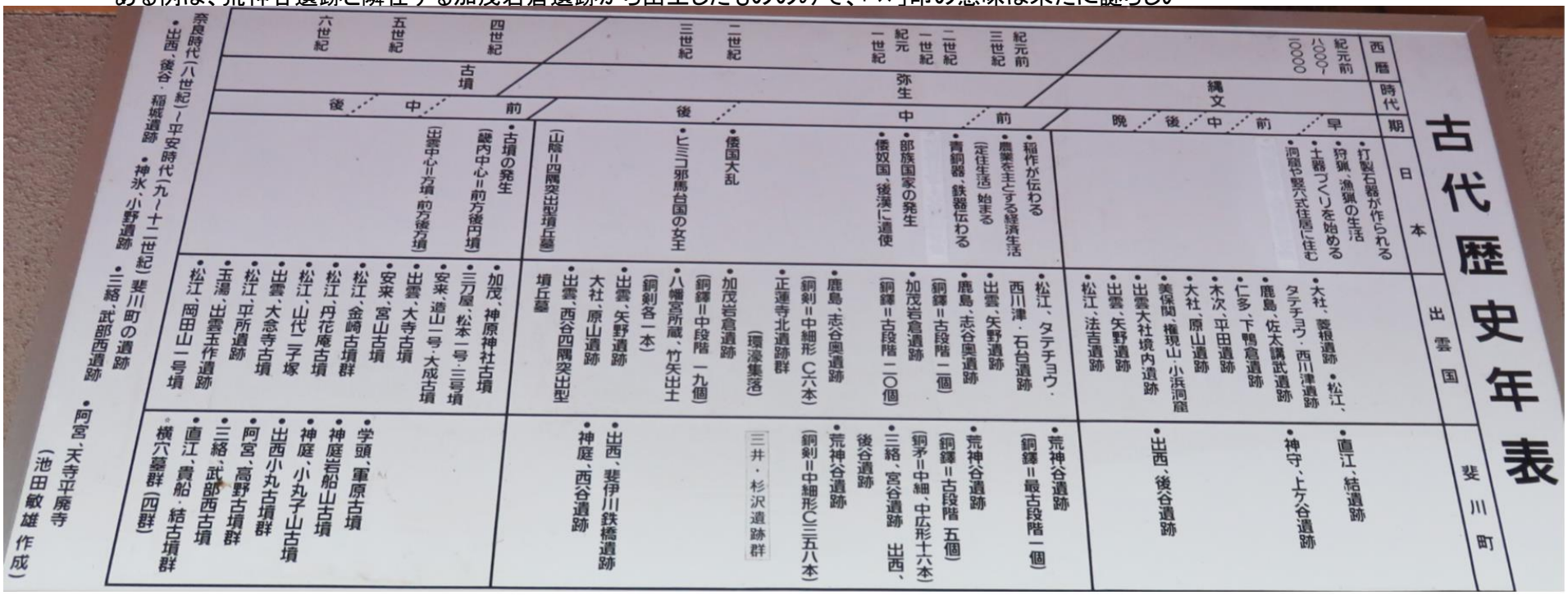
銅剣出土状況

銅鐸・銅矛出土状況

荒神谷遺跡周辺から見つかった遺物・遺構



銅剣358本のすぐ近くに埋められていた銅鐸6個と銅矛16本の組合わせは、これまでに例のないもので、銅鐸には国内最古型式のものが含まれ、銅矛には北部九州で出土する銅矛にみられる綾杉状の文様があったと云う/また、銅剣358本のうち344本の中子部分に「×」印がある例は、荒神谷遺跡と隣在する加茂岩倉遺跡から出土したもののみで、「×」印の意味は未だに謎らしい



さて、ここが荒神谷遺跡

発掘状況が再現されている

荒神谷遺跡発掘再現

島根県出雲市斐川町神庭

1984（昭和59）年、このあたりに新しく広域農道を建設する計画がありました。遺跡があるかどうか、それを確かめるために予定地のところどころを掘ることにしました。7月11日発掘開始、2日目に小さな銅片がみつかりました。「青銅器だろうか」「まさか」と発掘関係者は思いました。しかし、そこから銅剣358本が発見されたのです。このときの発掘調査はひとまず9月に終わりました。

まだまだあるのではないか。翌1985年の7月、地中に電波を発射したり、電気を流して地下の状況を探る装置を使って地表面から調べたところ、銅剣の東7メートルほどの地点で反応がありました。そこを発掘すると、銅鐸6個と銅矛16本がみつかりました。

ここで発見されたのは、コメ作りのはじまった弥生時代の青銅製の祭りの道具です。それがこれほど多数まとまって1か所から出土したのは初めてです。3種類の祭りの道具が1か所からみつかったのもここだけです。しかし、なぜこれほど多数まとめてここに埋めたのか、それはまだ解けていない謎です。

農道は計画が変更され、1987年には、このあたり一帯、約1.3ヘクタールを史跡に指定、保存することになりました。

斐川町は現地に発掘状況を再現しました。現地に立ってください。そこで発掘当時の感動を味わいながら、二千年まえ、ここに祭りの道具を埋めたわれわれの祖先のこころに想いをはせてください。

空から見た荒神谷遺跡

荒神谷遺跡合成写真

指導監修
文化庁
奈良文化財研究所
[illegible]
写真提供
島根県教育委員会
[illegible]センター
1990年11月
修正 2011年3月
出雲市

左手が発掘現場

左手の発掘現場を見たところ

正面から見たところ/左手に「銅剣358本」、右手に「銅鐸6個」「銅矛16本」の表示とレプリカが置かれている

こんな塩梅

反対側から見たところ

銅剣発掘再現 ——1984年8月の状況

穴のなかに4列に並べて埋めた銅剣がみつかりました。左から、34本、111本、120本、93本合計358本です。右の銅鐸や銅矛と同じく、銅に錫を加えた合金の青銅を材料としたものです。ただし、製作当初は、このような青い色ではなく、金と銀との中間のような光り輝く色でした。銅剣は、本来は短い柄をつけた短剣で、突き刺す武器です。それが弥生時代の日本では扁平な大型品になり、祭りの道具に使われるようになります。この銅剣も祭りの道具で、柄もつけなかったものでしょう。刃を研いですり減った痕跡もありません。ここでは、銅剣の出土した地面の上に30センチほど土を盛って発掘当時の地表面を再現し、そこに青銅製の複製品を出土した状況で置いてみました。

銅剣出土状況

銅剣（実物大）

×印のある銅剣

北九州を中心に中・西日本から出土する銅矛と近畿地方を中心に東西に広がっている銅鐸が一緒に見つかった

銅鐸・銅矛発掘再現――1985年8月の状況

左の銅剣がみつかった翌年、銅鐸６個と銅矛16本が１つの穴のなかに埋めた状況で発掘できました。銅鐸は中に棒をつるして鳴らします。弥生時代の農村では、その音が鳴って祭りが進行したのでしょう。ここで発見された銅鐸は、細かくみると、文様や形などに他にはない独特の特徴をもつものも含まれています。銅矛は、もともとは柄をつけて槍のように使った武器ですが、ここにあるものは、幅も広く、大きくなり、柄をさしこむ根元の穴に鋳型の土が詰まったままで、柄を差しこむこともできません。刃の部分に光をうけると独特の反射をする研ぎかたをしたものもあります。悪を倒す威力をもった祭りの道具だったのでしょう。銅矛は北部九州を中心に中・四国からも出土し、銅鐸は近畿地方を中心に東西にひろがっていますが、この2種類が一緒にみつかったのは、ここ荒神谷遺跡だけです。

1号銅鐸（A面）
実物大

銅鐸銅矛出土状況

15号銅矛

ここは荒神谷博物館　　（クリックしてビデオを見る）

一片の土器から

１９８３年

昭和58年４月13日、この地に広域農道をつくるために遺跡の分布調査を実施しました。その際にここで一片の土器を拾いました。調べてみると古墳時代から奈良時代にかけての須恵器とわかり、このあたりに集落があるのではないかと推察されました。
翌年、周辺の発掘調査を行なったところ後方の谷奥斜面から銅剣が大量に発見されたのです。

【荒神谷遺跡発見発端の地】

荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡
—ふたつの遺跡のなぞ—

荒神谷と加茂岩倉。大風山を挟(はさ)んでわずか3.5kmしか離れていない二つの地点に大量の青銅器が埋められていました。

二つの遺跡には多くの共通点があります。せまくて閉鎖的な谷の急斜面、けた外れの量の出土、青銅器に刻まれた×印…。

これらの大量の青銅器がどこでつくられ、誰が所有し、そしてなぜ埋められたのかはまだわかっていません。

遺跡名	荒神谷	加茂岩倉
場所	谷奥 南東斜面中腹	谷奥 南西斜面中腹
標高	22m	137.5m （谷底から約18m）
埋納品	銅剣358本（全国最多） 銅鐸6個 銅矛16本	銅鐸39個（全国最多）
製作時期	銅剣 …… 中期後半～後期前半 銅鐸 …… 前期末～中期前半 銅矛 …… 中期～後期前半	銅鐸 …… 中期前半～後半
埋納時期	銅剣 …… 中期末～後期前半以降 銅鐸・銅矛… 中期末～後期前半以降	銅鐸 …… 中期末か後期初頭
共通点	×印（銅剣344本）	×印（銅鐸14個） ・外縁付鈕式（9個） ・扁平鈕式（5個）
相違点［その1］	銅鐸6個は鈕と鈕を向き合わせた状態で埋められている。	銅鐸39個は2個一組の大小の入れ子の状態で埋められ、鈕と鈕を向きあわせているものと、そうでないものがある 埋納状況の復元案のひとつ
相違点［その2］銅鐸の型式	菱環鈕式（1個）＋外縁付鈕式（5個）	外縁付鈕式（30個）＋扁平鈕式（9個）

青銅器が埋められた谷の営み
—西谷遺跡・西谷Ⅱ遺跡—

大量の青銅器が埋納された斐川町神庭西谷(かんばにしたに)。ここに人は住んでいたのでしょうか？これまでの調査では弥生時代の土器と一緒に、溝状の遺構がみつかっています。この地層から土を採取してプラント・オパール分析をおこなったところ、イネのプラント・オパールが検出されました。このことから、調査区周辺に弥生時代の水田跡や住居跡といった遺構が存在する可能性が出てきました。

また、博物館の敷地の下からは、「二真手」と墨で書かれた奈良時代の土器が出土しています。別の地点では奈良時代から平安時代の水田面とともに無数の牛の足跡がみつかっています。青銅器が埋められてからおよそ800年後に営まれた谷の暮らしが見えてきます。

荒神谷遺跡周辺地形図

プラント・オパール分析試料を採取したところ

プラント・オパール顕微鏡写真

プラント・オパールとは
イネ科植物の葉に含まれるガラス質の細胞です。植物が枯れたあとも土の中に残るので、植物種の判定に利用されます。

参考ホームページ

http://www.kojindani.jp/iseki/

https://www.izumo-kankou.gr.jp/1696

http://inoues.net/ruins/koujin.html

https://www.izumo-enmusubi.com/entry/koujindani/

http://www.adnet.jp/nikkei/shiseki/contents/094.html

宍道湖
一畑電車北松江線
一畑電車大社線
山陰本線
木次線
出雲市
雲南市
431
9
E9
54
184